2014 年 12 月 11 日

ＮＧＯサポート募金

「女性の自立支援」分野

2012 年度活動報告書

目次（報告団体一覧）

(特活)幼い難民を考える会……2
(特活)オックスファム・ジャパン……4
(特活)かものはしプロジェクト……5
(公財)ケア・インターナショナル　ジャパン……7
(特活)地球市民ＡＣＴかながわ……9
(特活)地球の木……11
(特活)難民支援協会……12
(特活)2050……14
(公財)プラン・ジャパン……15
(特活)ブリッジ　エーシア　ジャパン……17

１．団体名	特定非営利活動法人幼い難民を考える会
２．プロジェクト名	織物技術研修を通じてのカンボジア女性の自立支援プロジェクト
３．該当の申請分野	女性の自立支援
４．活動地域	カンボジア：　タケオ州、コンポンチャム州
５．支援対象者	タケオ州、コンポンチャム州在住の織物に従事する女性たち
６．事業実施の背景と必要性	カンボジア絹織物は、優れた染色技術を継承してきた世界に誇る伝統文化だが、内戦を機に途絶えかけた経緯がある。本会は1980年以来、織物研修による女性の収入向上と伝統の保存・復活を目指してきたが、長引く経済の低迷は、織物をやめて農村から都会へ出稼ぎに出る女性の増加を招いている。農村部で織物を続け家族を支える女性の存在は貴重であり、技術と質の向上と販売促進が可及的速やかに求められている。製品の質向上のためには天然素材で「青色」を出すことが重要であるため、現在コンポンチャム州で取り組んでいる藍染めの技術確立の必要性はたいへん高い。
７．実施した活動内容	**【藍染織技術の確立（コンポンチャム州）】10名** ・沖縄から派遣した専門家2名の指導のもと、技術の確立のため泥藍（染料）づくりと染めの研修を繰り返した。 **【織物技術の向上ならびに女性の自立支援巡回研修（タケオ州）】112名** ・織物事業の拠点である織物研修センター近隣3村で、5日間のワークショップを6階開催し、技術の向上を求める女性たちの要望に応えた。 **【伝統文化の継承、高品質の織物技術～ピダン研修（タケオ州）】4名** ・伝統的絹絵絣（ピダン）の研修（3カ月間）を実施し、高度な技術を徹底指導した。
８．主な活動成果	藍染技術：　同国自生の藍葉による染め技術の復活は難しい。しかし、試行錯誤の結果、綿糸の藍染めでは堅牢度の向上を達成した。次年度は、絹糸染めの成功を目指す。 巡回研修：　新しい図柄を習得する研修を通じて織り上げた布地を、多くの研修生がこれまでより高値で販売することができた。 ピダン研修：　織り経験者を対象とした研修の結果、芸術性に優れた作品を仕上げることができた。この成果は、今後の活動で注力を決意しているピダン展示会等に活用したい。 7月に実施した藍染技術研修で、泥藍（染料）づくりを学ぶコンポンチャム州の参加者

		2月の修了式で、織り上げた作品を持つピダン研修の修了生4人

１．団体名	特定非営利活動法人　オックスファム・ジャパン	
２．プロジェクト名	洪水への備えと気候変動適応 (インド・ビハール州)	
３．該当の申請分野	農業・農村開発支援／女性の自立支援	
４．活動地域	インド・ビハール州	
５．支援対象者	農村の住民	
６．事業実施の背景と必要性	対象地域はインドのなかで最も貧しく、また洪水に頻繁に襲われる。近年気候変動の影響を受け、農作物の収穫高も下降傾向にある。気候変動に適応し、かつ現地のコミュニティにとって適性な新しい農業技術の導入と、村の組織化と防災対策による、災害への耐性の強化が必要とされていた。	 洪水に備えた防災訓練として、伝統的に男性の役割とされた船の操作を女性たちが練習している様子 村の9-14歳の少女たちで組織された「ファーストエイドチーム」による、汚れた水を煮沸し、ろ過することで飲料用にするデモンストレーション
７．実施した活動内容	・　対象の村で防災トレーニング、災害時の公衆衛生トレーニングを実施し ・　現地のパートナー団体対象の緊急人道支援とアドボカシーのトレーニング ・　有機肥料づくりとムギ強化法(System of Wheat Intensification -SWI)の導入	
８．主な活動成果	・コミュニティの防災力の向上 ・インドの現地ＮＧＯの水害への対応能力が強化。 ・食料・収入向上のための農業技術(SWI等)の定着	

1．団体名	特定非営利活動法人かものはしプロジェクト
2．プロジェクト名	コミュニティファクトリー経営事業 ポトペト ドイムノータック孤児院支援事業
3．該当の申請分野	女性の自立支援／保護が必要な子どもの支援
4．活動地域	カンボジア シェムリアップ、ポイペト
5．支援対象者	コミュニティファクトリーで働く貧困層家庭の女性 ドムノータック孤児院入居児童
6．事業実施の背景と必要性	かものはしプロジェクトは、子どもが売られる問題を防ぐために活動するNPOです。当時大学生だった代表の村田早耶香が、東南アジアで6 歳の子どもが無理やり体を売らされている現実を知り、仲間と共に10 年前に始めました。児童労働の中でも、特に子どもの心と体を傷つけるこの問題は最悪の形態の児童労働と言われています。この児童買春問題の解決のためにかものはしプロジェクトはカンボジアで「子どもを買わせない・売らせない」ための活動をしています。コミュニティファクトリー経営カンボジアの最貧困層10 万人がすむ農村で生活雑貨を手作りするファクトリーを経営しています。働きにくる女性の家庭は借金が多く、一日満足に食べられないため、病気になったときに、危険な出稼ぎに行く途中で人身売買の被害に遭う可能性が高いのです。これを防止するため、自分の力で稼げるよう仕事を提供しています。 孤児院支援 タイとの国境地域ポイペトにあるドムノータック孤児院の支援は子どもを「売らせない」ための活動です。タイと国境沿いにあるこの街では新しい生活を始めることができるという誤った風評があります。しかし、住民の多くは1日1 ドルかそれ以下の生活を強いられています。この貧困が人身売買や商業的性的搾取、また薬物売買などの被害に遭う危険を高めています。 そこで今回のプロジェクトは、この地域で人身取引被害に遭う可能性の高い子どもたちを保護し、子どもたちの自立を促すことで、人身取引や児童買春を防ぎ問題を解決することを目指しています。
7．実施した活動内容	コミュニティファクトリー経営 厳しい環境で暮らす31 名の女性を新たに採用しました。また、3 店目の直営店をカンボジア最大の観光地である「オールド・マーケット」にオープンし売上の向上を図りました。8 月からはチームリーダーのトレーニングを本格化させ、女性たち一人ひとりが仕事を主体的に行う力をつけていくことに注力しました。13 年2 月からは、遠方から通う女性の危険を減らすため、10 キロ離れた場所で20 人弱の規模の新たな織物工房を始めました。 孤児院支援

コミュニティファクトリーの女性達

	子どもたちが健康に暮らし学び、安心して暮らせる生活基盤を作るために、安定した衣食住を年間通じて提供しました。また教育の機会を提供し、社会で自立して暮らすトレーニングを行うための支援を行いました。孤児院に暮らす子ども達は全員、農業やレクリエイション、創作活動等の生活スキルを学びました。	 孤児院の子ども達
８．主な活動成果	コミュニティファクトリー経営 働く女性が130名を超え、離職率が減少しました。過去2年は離職率が30％を超えていましたが、2012年度は11％と大幅に減少しました。売上は前年比201％と大きく成長し、黒字転換できる損益分岐点に近づいています。 孤児院支援 46人の子どもが孤児院で過ごし、1年間で合計11名の子どもが家族の元に帰ることができました。46名全員の子どもに、衣食住のサポートを提供することができました。	

１．団体名	公益財団法人 ケア・インターナショナルジャパン	
２．プロジェクト名	遠隔農村地域におけるコミュニティ運営による初等教育事業	
３．該当の申請分野	女性の自立支援	
４．活動地域	アフガニスタン パルワン州とカピサ州	
５．支援対象者	小学校が遠方にあり学校に通えない小学校年齢児童（男児も含むが主に女児）、並びにそのコミュニティ地域住民	
６．事業実施の背景と必要性	アフガニスタンは20年以上にわたる国内外の紛争の結果、現在も、世界の中で社会的、経済的指標が最も低い最貧国のひとつとされる。紛争下、子どもたちは質の高い教育を受けることができず、 1990年代半ばからは、タリバン政権下において女性に対する権利は抑圧され、学校へ通えた女子はわずか5%とされる。 5～24歳の女子の識字率は18.4%でしかない。また、アフガニスタンの育システムは紛争以前からも非常に脆弱である上に人材の不足（教教教師、特に女性教師）や財政面、 行政の体制面での弱さなどから、教育システムの改善と発展は現在も非常に困難な状態にあり、 今、子どもたちの初等教育を受ける権利に応えるため、包括的な支援が急務とされている。 特当該事業地であるルワン州とカピサ州は、アクセスが困難なため、従来より支援が行き届かなかった地域である。 公立学校は山岳地の中に点在し、多くの就学対象児童は、山道を何キロもかけて通学しなければならない。 また特に女子においては、社会的・文化的背景により移動が制約されているため、より困難な状況に置かれている。	 遅刻や欠席することなく学校に通うようになったBelquess(8歳) 図書館で学習する子供たち
７．実施した活動内容	1.モスク・民家などを活用し、20の学習教室を設置。昨年度設置した学校を含め、合	

	計50の教室の運営を支援。 2. 初等教育就学年齢の子ども、1,486人（うち女子7割）に対して、教育の機会と教材・文具を提供。 3. 9～12年（中等教育以上）を卒業した住民から教師候補を選出し、50名（うち女性3割）に対して教師研修などを実施。 4. 住民から選出された５０の学校運営委員会（うち女性5割）を組織し、厚生委員の能力向上を図った。	
８．主な活動成果	当財団が昨年度設立した３０校に通学する887名は2年生を終了し、今年度新規に設置した２０校に通学する599名が1年生を終了。期末試験においては、全員が平均80点以上の優秀な成績を得て、無事に進級を果たした。従来より支援が行き届いておらず、学校にいけない子供たち、またいけたとしても何キロも危険を伴う山道の中、通学をしなければならなかった子どもたちの数は、確実に減少している。 　また学校で、読書き・算術を習得し、保健衛生などの知識を得た子どもたちは、家庭や地域生活の中で学習した知識を活用するなど波及効果も確認。村人も、こういった子供たちの成長を確認する中で、教育の重要性をより深く理解するようになっている。	

１．団体名	（特活）地球市民 ACT かながわ/TPAK
２．プロジェクト名	インド思春期女性自立支援プロジェクト
３．該当の申請分野	女性の自立支援
４．活動地域	インド北部ウッタラカンド州
５．支援対象者	思春期女性
６．事業実施の背景と必要性	2010年に実施した思春期女性1000名への健康調査では、その100%が貧血状態であった。数年の間に妊産婦となる可能性の高い思春期は、体の基礎づくりが重要な時期だが、対象地域では栄養価の低い質素な伝統食をとっており、鉄分不足による貧血は深刻な問題である。
７．実施した活動内容	思春期女性の中から「健康な食」推進リーダーを育成し、栄養改善の普及活動を行うことによって、女性自らの力で健康な身体づくりができるようになることを目指す。(1 年目) インド北部ウッタラーカンド州の10村の思春期女性に対して、下記のような活動を実施した。 1.「健康な食」推進リーダー育成研修 2.「健康と栄養」キャンプ 3.「食の安全」ワークショップ
８．主な活動成果	1. 「健康な食」推進リーダー育成研修 各村から選ばれた計20名の思春期女性に対して3日間の育成研修を実施した。 2.「健康と栄養」キャンプ 各村で栄養の基礎知識についての講義、身体測定などを実施した。 3. 「食の安全」ワークショップ 各村で微量栄養素、家庭治療法などの講義、調理実習を実施した。 ※2013年度も継続 「食の安全」ワークショップの様子 調理法により栄養摂取量が変わることをレクチャー 「健康と栄養」キャンプ

		バランス栄養食や個々の栄養についてのポスターにより日常的に学ぶ

１．団体名	特定非営利活動法人 地球の木
２．プロジェクト名	クメールシルクプログラム
３．該当の申請分野	女性の自立支援
４．活動地域	カンボジア　タケオ州
５．支援対象者	カンボジア　タケオ州　プノムチソー周辺の女性たち
６．事業実施の背景と必要性	カンボジアでの右肩上がりの経済成長は、必ずしも人々を豊かにするものではなく、貧富の格差をさらに拡げている。農村の人々はさらに現金が必要な生活になり、加えて物価の上昇は貧困層に重くのしかかっている。支援地のタケオでは進学をあきらめ、家族のために工場へ出稼ぎにいく少女たちが後を絶たない。工場への出稼ぎは、農村地域の収入向上につながってはいるが、一方で賃金の搾取や労働条件、環境の問題等、問題も多い。また、従来通り、織物で生計を立てている織物村の人々にとっては、物価の上昇や生糸の価格高騰は、大きな負担となっている。貧困から抜け出すためには、農村部の少女たちが村に留まり、学業を続け、将来の選択肢を広げることができるようになることが重要である。そこで、伝統的な織物技術を習得しながら家計を助け、学業を続けることができる訓練センターの役割は大きい。
７．実施した活動内容	農村部の少女たちに織物を教える訓練センターでの織物のデザイン・技術のアドバイス、昼食代の支援を実施。また、織物村のアン村で、貧困家庭自然素材を使った染色を復活させ、伝統的な模様を取り入れた織物の受注ができるようになるための調査、指導をおこなった。 ラックカイガラムシを使った自然染色 私の一番好きな一枚
８．主な活動成果	訓練センターで織物の技術は向上し、デザインも市場で「売れる」デザインになってきている。アン村では、リサーチを兼ねながら現地との関係作りをおこなうことができた。

１．団体名	認定 NPO 法人　難民支援協会	
２．プロジェクト名	クルド難民女性への自立・エンパワメント事業	
３．該当の申請分野	女性の自立支援	
４．活動地域	日本	
５．支援対象者	難民女性	
６．事業実施の背景と必要性	迫害を逃れ日本で保護を求めるトルコ出身のクルド難民（申請者を含む）は数百人に達しており、多くが生活に困窮している。中でも、女性たちは、家庭内に留まり、社会との接点が少なく、孤立しがちである。そのため、日本語を学ぶ機会は少なく、社会で働くことも難しい。事業を通じて、女性たちの孤立化を防ぎ、コミュニティネットワークの形成を通じて、自立に向けたエンパワメントを行う必要があると思われる。	
７．実施した活動内容	●クルドの伝統手工芸「オヤ」を通じた自立支援とグループでの政策を通した、エンパワメントを目的とした支援活動。クルド難民が集住する埼玉県蕨市にて、定期的にワークショップを主催し、グループにてオヤを制作した。 ●クルド難民がやさしい日本語を理解習得し、地域支援の枠組みに入れるよう、月2回程度、日本語教室を開催した。ひらがな、生活日本語会話、基本文法語彙取得と、日本の文化慣習への理解促進を向上させた。 ●その他、未就学児から高校生への学習支援も行っている	 ワークショップでオヤを作る女性
８．主な活動成果	●難民女性が制作したオヤを購入する方々の写真やコメントを繰り返し伝えることにより、社会的に孤立しがちなクルド難民女性が社会とのつながりを更に実感し、主体的に作品制作に取り組む様子が伺えた。 より魅力的な作品を作るために、スタッフと直接コミュニケーションを取るべく、日本語学習に意欲的な者も増えた。 ●制作されたオヤ作品を用いて、「オヤ・カフェ」などの広報啓発イベントなどを	 オヤ・カフェの様子

	実施し、一般の方々がクルド難民女性とその文化背景を知る機会を提供することができた。 ●日本語教室の成果として、以前は通訳を介しての会話がほとんどであったワークショップでも、日本語で直接スタッフとコミュニケーションを取る場面が多くなった。	

１．団体名	特定非営利活動法人 2050	
２．プロジェクト名	中国シルクロード緑化活動	
３．申請分野	環境保全・環境教育／女性の自立支援	
４．活動地域	中国黄土高原の農村地域	
５．支援対象者	中国黄土高原の地元農民	
６．事業実施の背景と必要性	中国で深刻化する環境悪化と経済格差、特に中国黄土高原における砂漠化とそうした環境の変化によって影響を受ける貧困農民に着目（男性は出稼ぎ労働者が多い当該地域では、対象は家庭を守る女性が大半）。事業を通じて、中国黄土高原の緑化、砂漠化防止ひいては地球規模の温暖化防止の一助となること、また、換金性・採算性の見込める事業を通して貧困農民の自立ある発展・生活向上の道標となることをミッションとしている。	 砂漠化が進む黄土高原に植林を行うための土地整備後の様子
７．実施した活動内容	中国黄土高原の土地整備、植林するための沙棘(サジー）の苗木の管理、沙棘の植林、植林後の管理。 ※これらの作業は中国の当団体関係者監修のもと、地元農民が自主的に行った。 また、これまでに植林し管理している沙棘については、農民の自助努力による果実収穫、加工、商品化、販売を目指しているため、商品化実現に向けたインフラ整備、人的資源整理等の準備を進めた。	 地元農民を中心に植林を行う様子
８．主な活動成果	30ヘクタールの土地に植林を実施。 同時に、水分確保のためにパイプラインを敷設。これにより、活着率の向上が確認された。 沙棘果実加工工場建設のための準備を実施。2.2キロの道路整備、貯水池・パイプラインを敷設、電力確保の低圧ケーブル敷設、工場建設のための土地整備。 NPO2050は、事業推進のための経済的な支援の他、植林活動への参加及び、植林後の管理の視察、その他全般に監修・助言等を通して支援を実施。	

１． 団体名	公益財団法人　プラン・ジャパン www.plan-japan.org
２．プロジェクト名	アフリカ： ベナン 養鶏による収入増加プロジェクト
３．該当の申請分野	女性の自立支援
４． 活動地域	ベナン　北西部のアタコラ県と南西部のクッフォ県
５． 支援対象者	アタコラ県とクッフォ県の15郡の20歳未満の女の子150人
６． 事業実施の背景と必要性	ベナンは、2011年に国連開発計画が発表した人間開発指数（HDI）の指標で187ヶ国中167位と、世界でも貧しい国のひとつに数えられています。女の子は男の子よりも教育を受ける権利などの基本的な人権を奪われ、社会的に自立する道も閉ざされています。特に農村地域ではその傾向が強く、家事労働の担い手として働かされます。公式教育の機会を奪われた女の子に、職業訓練や非公式教育を受けるための支援が整っていないため、経済的な支援を頼った男性から性的な虐待を受けるケースも見受けられます。このため、女の子が社会で必要なスキルを身につけ、安定した収入を得るための対策が必要です。 これまでは伝統的養鶏は収益の低さや時代遅れのイメージから、将来性が乏しいとされ、技術の改良や事業拡大が注目されてきませんでした。しかし、最近になって政府も養鶏の可能性に着目するようになり、国の貧困撲滅対策で農業重点分野に指定するなど、養鶏事業を促進しています。クッフォ県やアタコラ県では、古くから主に女性が担い手となり、生計を助けるための小規模な伝統的養鶏が行われています。短時間で成鳥となる鶏は飼育が比較的易しいこと、伝統的養鶏は高度な専門技術を必要としないことから、トレーニングによって技術の習得が可能です。さらに、この地域での鶏肉の市場ニーズは安定しており、一定の流通ルートも確立されているため、飼育に成功した場合、高い経済効果が期待できます。
７． 実施した活動内容	・ 養鶏に関する基本トレーニング　(150 人) ・ 鶏舎設置と家禽の支給　(150 人、1,650 羽) ・ 預金貸付協同組合の立ち上げ　(15 グループ) ・ リーダーシップトレーニング　(150 人) 受益者の女の子のひとり。無事にひよこが生まれています。

		 トレーニングをうける女の子たちとトレーナー
８． 主な活動成果	地域の人々が作成した推薦リストをもとに、条件を満たす女の子たち 150 人が選ばれ、2 週間のトレーニングが始まりました。その後、女の子たちは、家族の協力を得て、鶏舎を建設しました。その後、ひとりずつ雄 1 羽、雌 10 羽を受け取り、飼育が始まりました。女の子が自分の力で鶏の売り上げを管理できるように預金貸付協同組合を立ち上げました。さらに、養鶏事業を通じて女の子たちが自身の可能性を広げるためのリーダーシップトレーニングを実施しました。このなかで、「リーダーシップとはなにか」「リーダーの役割」「リーダーに必要なスキルや資質」「リーダーシップの形」などを詳しく説明しました。以前は、学校に行っていない女の子や結婚せずに子どもを産み育てている女の子たちは、家族や地域から一段低く見られていることもあり、女の子自身が自分に自信を持つことができませんでした。しかし今では、養鶏の専門知識を学んだ女の子たちに、地域の人々が養鶏について相談するようになりました。また、養鶏での成功を通じて自分自身の能力を見直し、自信をつけることができました。さらに、女の子同士が団結しながら、養鶏技術を高めようとする姿勢も多く見られるようになりました。	

１．団体名	特定非営利活動法人ブリッジ エーシア ジャパン	
２．プロジェクト名	女性の自立支援と収入向上を目指すコミュニティ社会開発事業	
３．該当の申請分野	女性自立支援	
４．活動地域	ミャンマー、ラカイン州北部地域	
５．支援対象者	帰還民の女性、生活基盤の脆弱な女性	
６．事業実施の背景と必要性	ミャンマー北西部、バングラデシュ国境のラカイン州北部では、かつて多くのイスラム系住民が隣国バングラデシュに難民として流出しました。その後国際機関や国際NGOによって難民の帰還や再定住活動が進められる一方で、依然として圧倒的な貧困を抱えている地域です。	
７．実施した活動内容	今年度は、6月上旬の大規模な民族衝突発生、それに伴う治安悪化により、6月以降は当初予定していた活動をやむを得ず全て停止しました。2012年4月から6月までは、同地域の女性の生活向上を目的として、以下の事業を行いました。 ①各村25人×5村＝125人の女性を対象にした初級裁縫訓練コース 訓練修了生による裁縫製品の販売を通した収入向上支援	 裁縫訓練中はみな真剣
８．主な活動成果	① 級裁縫訓練コースを実施した５村で、女性たちがミシンを使った基礎的な裁縫技術を学びました。また、民族・宗教的背景の異なる女性たちが共に受講し、女性たちの相互交流の機会が生まれました。 ② 財布、バッグなど裁縫製品の販売による収益が、製作者の女性たちに還元され、現金収入向上につながりました。また、活動を通して女性たちが品質管理や在庫管理の知識を学びました。	 ミシンを練習する女性たち